

戦いの場にも愛がある —赤十字の恩人アンリ・デュナン—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

イタリア統一戦争で死傷した兵士たちの悲惨な姿に衝撃を受けたアンリ・デュナン(1828-1910)は女性たちに交って救護活動に没頭した。過酷な戦争の犠牲者に敵も味方もないという人道主義的な思想が芽生える。

戦場での体験を綴った手記はヨーロッパ各国で反響を呼んだ。デュナンは戦時救護団体をつくることを協議する国際会議の招集に成功し、世界的な赤十字活動の事実上の創始者となる。

その反面、実業家としての信用は失墜していった。会社が経営危機に陥り、資金を援助した株主たちから訴えられ、裁判所から破産宣告を下される。赤十字の活動からも追われるように身を引き、約20年ものあいだ消息を絶つ。デュナンは市民社会の脱落者として完全に忘れられた存在となった。だが彼の終着駅はまだ先にあった。

アルジェリアで会社設立

デュナンはスイスの南端にある風光明媚な都市ジュネーブで生まれた。父は共和国代議員や孤児院の院長を務めた地元の名士、母も名家の出身で幼い頃から貧民街での慈善活動に連れていかれた。厳格なプロテスタントの家系で宗教改革の指導者ジャン・カルヴァンの名を冠したコレージュ・カルヴァンに入学。愛の突撃隊と命名された奉仕グループに加わり、率先して病院、孤児院、貧困家庭などの慰問活動を行って評判になる。しかし学業の方は振るわず3年ほどで中退した。

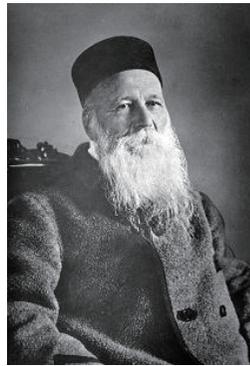
21歳になった1849年、2年間の見習い期間を経て正式に銀行員として採用される。仕事の傍らYMCA(キリスト教青年会)の活動に熱心に携わり、国際的な組織づくりを提唱した。

1853年、フランスの植民地であるアルジェリアへの出張を命じられ、現地の人々の虐げられた貧しい生活に驚愕する。翌年、アルジェリアで産業を興そうと銀行を退職し、現地の人々を雇用する製粉事業の立ち上げに着手した。生来の行動力と雄弁家としての才能を発揮して親族や友人たちから資金を調達することに成功。1858年、30歳の若さで念願の製粉会社を設立する。4階建ての社屋を構え、最新型の水車4機と製粉機を取り揃えた。

ところが土地と水源の使用権が不明確であったり、フランスの駐在事務所が非協力的だったり、難問が続出し、水不足もたまって事業は難航する。デュナンはフランス皇帝のナポレオン3世に土地と水利権の拡張を直訴しようとパリへ旅立った。

ソルフェリーノの思い出

イタリア統一戦争に介入してオーストリア帝国と戦っていたナポレオン3世は北イタリアの丘陵



アンリ・デュナン

地ソルフェリーノに転戦していた。1859年6月24日の夕方、デュナンはナポレオン3世を追ってソルフェリーノに辿り着く。現地では両軍あわせて20万を超える兵士が激突し、死傷者は4万人近くにのぼっていた。

地元の女性たちが戦場に放置された^{おびただ}負傷者たちを敵味方の区別なく黙々と手当てしていた。デュナンも手助けし、それから1週間にわたって救護活動に明け暮れた。

ソルフェリーノにおける強烈な体験はデュナンの新たな転機となった。戦場で公平・中立・平等に負傷者の救護にあたる組織の必要性を痛感し、みずからの考えを訴える手記の執筆を開始する。

1862年に上梓した『ソルフェリーノの思い出』はヨーロッパ中で予想以上の反響を巻き起こした。イギリスのチャールズ・ディケンズ、フランスのヴィクトル・ユーゴーなどの文豪が讃辞を送り、看護師の先駆者フローレンス・ナイチンゲールは経済的基盤のないボランティア活動を批判したものの、デュナンの献身的な熱意は認めていた。

ジュネーブの法律家ギュスターヴ・モアニエはデュナンの主張に共鳴し、全面的な協力を申し出る。1863年、デュナンとモアニエを中心に医師や軍人を含む5人で国際負傷軍人救護常設委員会、のちの赤十字国際委員会(ICRC)の母体となる通称5人委員会をジュネーブで結成した。

国際会議を招集するためにデュナンは旅行鞆に『ソルフェリーノの思い出』を詰め込んで各国を飛びまわる。政府の指導者らと会って「傷ついた兵士はもはや兵士ではない。人間である。だから人間同士として尊い命を救わなければならない」と力説した。熱烈な訴えに呼応してヨーロッパ16カ国の参加による初の国際会議が開かれ、各国で戦時救護団体を組織する赤十字規約を採決する。翌年の16カ国外交会議では初のジュネーブ条約を締結し、国際的な赤十字組織が正式に誕生した。赤十字のマークとなるクルア・ルージュは発祥の地であるスイスに敬意を表し、国旗の配色を反転させたものといわれている。

アルジェリアの事業はコレラの流行やイナゴの大量発生で危機的な状況に陥っていた。1865年、取引先の信託銀行が倒産して会社の経営が行き詰まり、事業に投資していた株主たちから裁判所に

訴えられる。1867年、ついに破産宣告を下されたデュナンは赤十字活動に対する信頼失墜を怖れたモアニエら5人委員会から辞任を迫られ、失意のうちに故郷ジュネーブを去って二度と戻ることはなかった。

失意と栄光のあいだで

年を重ねるごとに赤十字の活動は戦争における負傷者の救護から自然災害の被災者に対する支援へと拡大していった。過去の人となったデュナンは極貧の身でパリ、ロンドン、シュトゥットガルトなどを転々とする。

1892年、スイス東北部ハイデンの公立病院院長のアルテル博士と知りあい、博士の好意で病院の一室に移り住む。20年以上の過酷な放浪生活から解放され、ようやく平穏な日々が訪れたデュナンは回想録の執筆を始めた。若き日のソルフェリーノの戦場を想起して「戦いの場にも愛があることを信じます。兵士たちが戦う力と意志を捨てたとき、人間はみな同じ人間です」と書き記した。

1895年、東スイスの新聞記者がたまたま病院を訪れてデュナンが孤独な生活を送っていることを知り、義憤を込めて記事を掲載する。「偉大なる赤十字の父をひとり淋しく放っておく世間に良識があるのか。人間というものそれほど恩知らずなのか。われわれはアンリ・デュナン氏にいまこそ温かい眼を注ぎ、その恩に報いなければならない」と。記事は世界的な反響を呼び、読者から多額の支援金が集まり、赤十字への功績を記念してデュナン基金が創設された。

ドイツの大学教授ドルフ・ミュラーは赤十字の歴史に関する著作を出版し、あらためてデュナンを創始者と位置づけた。同時に平和への貢献を立証する文献を収集し、ノーベル賞選考委員会に推薦して1901年、第1回ノーベル平和賞を受賞する。賞金は遺言によって赤十字に寄付された。

晩年は借金取りに追われる不安障害や赤十字から追放されたトラウマに苦しめられることもあったという。例年より初雪が早く降った晩秋の夕刻、ハイデンの病室で82年の生涯を終える。葬儀はなくチューリヒの共同墓地に埋葬された。名誉は回復しても故郷に帰る日はついに訪れなかった。